

これで生きて

連載スタートに寄せて

長引く不況で、先が見えないこの時代。人々は新しい働き方をどう見つけ、どう生きていけばいいのか。テレビや著書で「仕事」について発言する小山薫堂さんと、女性起業家の支援を続ける菅原智美さんが語り合った。
(司会は共同通信編集委員・緒方伸一)

先見えぬ時代 どう「働く」

夢や目標を持っていないことが挙げられる。

人との出会い

小山 日本人は「ぶれる」ことはないかと思われているが、今はぶれないと生き残れない。バスケットボールのピポットのよう、軸足は今の仕事に置いて動かさず、もう片方の足は動かしながら最良のパスを出す判断をすることが求められている。

菅原 女性の起業家を支援している立場から言うと、民間調査会社のデータで女性経営者の割合が日本は6%。米国は25%、アジア各国も40%以上なので極端に少ない。消費を決めるのは90%が女性だと言われているのに、女性が経営者として活躍していない。

子どもがいる女性が働きにくい状況も相変わらず。最近会った33歳の女性は、子どもを産む前は不動産の営業で数千万円も稼いでいたのに、復帰しようと30社受けて全て落ちてしまったという。



対談する小山薫堂さん(左)と菅原智美さん

今はぶれないと生き残れない— 小山 薫堂さん

一日常から一歩踏み出す方法はあるか。

菅原 誰と付き合うかで人生は変わる。新しい人と話すと新しい情報も入ってくる。セミナーや勉強会に参加して多くの人と会えば、やりたいことが見つかると思う。

小山 行き詰まっている人は自分のことしか考えていない。打破する方法として、自分のことを差し置いて、他人のことを考えてみる。行動してみればどうか。そこに新しい出会いが生まれるきっかけがある。

海外進出とシニア

一お二人の働くモットーは。

小山 「俺たちは幸せだ」という父の言葉が僕のベースにある。父は「戦国時代なら、働くとは人を刀で斬ること。現代に生まれても、水をくむため毎朝2時間歩く国もあるんだぞ」とよく話していた。仕事で失敗しても戦国時代のように殺されないんだから、好きなことをやって人生を楽しまおうという思いがある。

菅原 新しいことにチャレンジするのが好きで、起業した。人から感謝され、私と会って「人生が変わった」と言われるとやる気が湧いてくる。

菅原 智美さん—誰と付き合うかで人生変わる

愛する人から感謝されるからではないか。働く人にとっては最高の。これからの働き方、進むべき方向は。

菅原 日本企業は海外に進出していると言われるが、大手企業の工場があるだけで、中小企業はほとんど進出していない。海外では日本人が経営しているだけでブランドになり得るので、中小企業のビジネスチャンスはいくらでもある。日本の優れた商品やサービスを海外に広げたい。

小山 最近、シニア世代のことを僕は「グランド・ジェネレーション」と呼んでいる。この「グランド」がどれだけ上手に無駄遣いをするかが、日本をもっと元気にするポイントだ。この世代がお金を楽しく使えば、日本の文化も向上すると思う。

例えば、神奈川県の大磯で60歳を過ぎた女性が自宅でカフェをやっている。大通りから入った住宅街なので、家族は「誰超えろ」と、ぐんと活性化も来ないよと止めたが、売上げゼロの日がないくらい繁盛している。

ハードル不要

一就職難でスタートがつかずしてしまおう。菅原 待遇が良いとか正社員でなくては駄目と掲げます。

来年1月から隔週で長期連載「これで生きる」を掲載します。

こやま・くんどう 64年熊本県生まれ。放送作家として「料理の鉄人」「カノッサの屈辱」など。09年、米アカデミー賞外国語映画賞を受賞した「おくりびと」で脚本を担当。09年から山形市の東北芸術工科大学教授。近著に「幸せの仕事術」。

すがはら・ともみ 70年新潟市生まれ。リクルートなどを経て、07年、女性起業家の支援と貸会議室を運営する「NATULUCK」設立。全国で約500人の女性経営者が登録する会員制の「女性経営者エメラルド倶楽部」の代表理事。